

住所 〒631-0046 奈良市西千代ヶ丘1-3-11

TEL 0742-41-0043

メール kansai@songenshi-kyokai.com

FAX 0742-45-1782

「尊厳死」から「尊厳生」へ

長尾クリニック院長 長尾 和宏

プロフィール

1984年東京医科大学卒、1995年尼崎市で長尾クリニック開業。医師8名、約30名の在宅チームとともに年中無休の外来診療と在宅医療に従事。日本ホスピス在宅ケア研究会評議員、日本消化器内視鏡学会専門医、医学博士。近著「町医者力」、「禁煙で人生を変えよう」「パンドラの箱を開こう」(エピック)

兵庫県尼崎市昭和通7-242 TEL 06-6412-9090

HP <http://www.nagaoclinic.or.jp/doctorblog/nagao/>

日常としての死

医師になってはや25年。病院勤務医として、そして開業後は在宅医療を通じて実に多くの人の最期に接してきました。現在も在宅医として週に1人の割合で看取りがあります。勤務医時代に1000人以上、そして在宅医として300人以上の人間の最期に接してきました。一人一人の最期が1冊の本になる位、沢山の物語があります。最近の在宅看取りはケアマネ、ヘルパーさんや訪問看護師さんがよくお世話してくれるので、医師として臨終の瞬間に立ち会うことは少なくなりました。以前は葬儀屋さんの方が早く到着して僕が死亡診断書を書きに伺うと既に祭壇が完成し線香が充満しお坊さんも帰った後ということもありました。しかし最近では葬儀屋さんもマニュアル化され医師の死亡診断書がないと遺体を手をつけてくれない時代に代わりました。法律は自宅での大らかな看取りを保障してくれています。しかしそれを一番知らないのは医療者です。そこで僕は看取りの実際に関する冊子を作り、本を書き全国の医療者に配ったり講演をする毎日です。

僕が死に興味を持ったわけ

僕が死に興味を持ったのは高校時代の身内の死でした。スポーツに明け暮れる普通の高校生がある日突然、

父親の自死に直面しました。この衝撃は大きく、高校卒業後1年間はブラブラしていました。アルバイトに明け暮れながら医師になり、現在は開業医として多くの人の死に関わり続けています。内科系クリニックとはいえ、外来ではうつ病診療や、産業保健ではメンタルケアに力を注ぐのはそんな原体験からでしょう。大学病院勤務時代には自分の後見人だった方の死に立ち会いました。彼は尊厳死協会に入っていて自分が死んだら病理解剖して医学に貢献したい、と普段から言っていました。後見人の病理解剖に立ち会った時は親父の死以来、なんとも不思議な気分でした。以来、自分も人生半ばで自死するのではないかという強迫観念に取りつかれ、自暴自棄的な気持ちで生きてきました。しかし親父が亡くなった年齢を超えてから、少し穏やかな気持ちに変化してきました。朝、目覚めた瞬間に生きていることに素直に感謝できる自分がいます。死を常に意識しながらも、生の喜びに感謝しながら生きています。多くの患者さんの死顔についても自分の死顔を重ねてみえています。「もうすぐ僕も行くからね」と呟きながら。かわいい患者さんの穏やかな死顔から、少し元気を頂いてもいえると言えれば不謹慎でしょうか。

死に尊厳があるのか？尊厳は生にあるのでは？

尊厳死協会のことは大学時代からよく知っています。長野県下伊那郡浪合村という無医村で春、夏、冬とボランティア健診をするサークル活動に明け暮れながらも、「死」に関する勉強も密かにしていました。聖路加病院の日野原重明先生をサークルの勉強会に引っ張り出したこともありました。千人単位の死に立ち会った現在でも、尊厳ある死とはなにかと問われても上手く答えることができません。しかし、尊厳ある生はあるのか？と問われれば、それは「ある！」と明言できます。なぜなら「ない」と感じる患者さんが残念ながらいるからです。病院で延命チューブに繋がれた患者さんの家族からSO Sコールが時々あります。「死んでもいいから自宅に連れて帰りたい。なんとか病院から出させて欲しい」と。しか

し僕にはそんな権限はありません。しかたなく「ご家族から主治医に頼んでください」と言うと、「頼んだら、病状が悪いので家には絶対に帰れません」という答えが必ず返ってきます。急性期病院に居続けるのも大変なら、療養期病院から抜け出すことも困難な、難儀な時代となりました。今、確実にいえることはとても尊厳あるとは言えない生を続けている患者が主に病院に沢山おられるという現実です。

在宅医療は尊厳死の選択

自ら在宅医療を選択した人は、実は尊厳死を選択したと僕は勝手に思っています。ご自宅で看取らせて頂いた300余人はすべて尊厳死でした。癌や難病で尊厳死を望むなら、予めホスピスやビハラー、そして在宅医療という選択をすることです。とはいってもピンピン元気な人も、この世の人間はいつ何時、種々の事故に遭遇して自らの意思表示が出来なくなる可能性を平等に有しています。その可能性を想起して行動に移せる勇気のある人の集まりが尊厳死協会だと勝手に解釈しています。僕は尊厳死協会に入っている患者さんが大好きです。死生観を共有しながら付き合えるからです。そんな患者さんが居る診察室はいつも笑い声に包まれています。

尊厳死協会に期待するもの

「おくりびと」という素晴らしい映画を2度見ました。2回目も涙が止まりませんでした。医療のプロとして押し殺して続けていた「死の悲しみ」が、一気にフラッシュバックしてきます。やはり悲しいものは悲しいし、少しは心が傷ついている自分に気づかされます。次は「看取りびと」という訪問看護師を主役にした映画、2匹目のドジョウを密かに狙っています。日本で初めて訪問看護師さんを題材にしたテレビドラマ「新・命の現場から」の制作に僕は関わりました。中村玉緒さん扮する訪問看護師長さんに今度は是非映画に登場して頂き、歪んでしまった日本人の死生観を見直す時期ではないでしょうか。高齢化と認知化が進む現在、自分の口から食べれなくなった人に胃ろうを入れる機会が増えています。延命胃ろうの適応については大変議論の分かれるところですが、しかし、確実に言えることは、「胃ろうを入れないと医師が訴えられる国は世界中で日本だけで、欧米では逆に胃ろうを入れると訴えられる」という現実です。この現実はどう日本人が向き合っていくのか。よく医療崩壊と言われていま

すが、本質は日本人の死生観の崩壊なのです。日本尊厳死協会は、その崩壊を食い止める救世主です。そして尊厳死協会が不要となるまで、その大きな役割を背負っていくものであると期待しています。

支部の動き

支部理事会は、奇数月に年6回開催し、必要に応じ臨時に開催する場合もある。会報委員会は現在までに7回開催し、その他本部関係の常任理事会、理事会、評議委員会、各種委員会など担当理事は東京での会議に出席した。又今年から組織的に始めた出前講座は、滋賀、京都で6回実施している。様々な地域活動と共に会員増強を目指し今後とも継続実施する。1月の理事会は会場を高槻赤十字病院の緩和ケア病棟の会議室で開催した。人見理事の案内でホスピス見学後、カール・ベッカー教授のグリーフ(悲嘆)ケアの講演を傍聴した。



出前講座

「尊厳死を考える・・・」

講演料無料にて講師を派遣します。会場と参加者の手配は貴団体でご高配願います。参加者の人数は問いません。

日本尊厳死協会 関西支部

TEL 0742-41-0043

FAX 0742-45-1782

関西支部2010年総会予告

日時	2010年10月17日(日)午後1:30～
場所	ピアザ淡海 滋賀県立県民交流センター(大津市)
講師	大津市民病院 緩和ケア科診療部長 津田 真氏
アトラクション	お話とオカリナ・よし笛の演奏 坂井 孝之氏